

日本語学習者の発話を「分かりやすい」と受けとめる要因

— 一般日本人と母語話者日本語教師の評価の視点から —

野原 ゆかり

学位取得年月：平成19年3月

取得学位名：人文科学修士

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】 分かりやすさ、一般日本人、日本語教師、因子分析

【要旨】

本研究では、一般日本人と日本語教師各50名から得られた質問紙調査の結果を分析し、学習者の発話を「分かりやすい」と受けとめる要因を探った。因子分析の結果、一般からは2つの要因（「内容」、「音声」）、教師からは3つの要因（「意味的つながり」、「言語使用の適切さ」、「音韻的つながり」）が確認された。さらに、重回帰分析により、一般では「内容」、教師では「意味的つながり」が、「分かりやすさ」に影響を与えていることが分かった。ただし、「分かりやすさ」と各要因との関係を質問紙調査で用いた刺激材料で検証した結果、教師では、「意味的つながり」に加え、評価の低い要因も「分かりやすさ」に影響を及ぼすことが示唆された。

（のほら ゆかり）

モンゴル語を母語とする年少学習者の 文法知識の形成過程

— 動詞と形容詞の活用形を中心に —

Naidan Bayarmaa

学位取得年月：平成19年3月

取得学位名：人文科学修士

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】 活用形、形成過程、定式表現、具体事例

【要旨】

文法知識の形成過程の解明に向け、JSL年少学習者を対象に、来日直後から収集した発話データや参与観察ノートを扱い、数量及び記述的分析を行った結果、1.動詞と形容詞の活用形は単純(無標)なものから複雑(有標)なものへと習得されていくこと。2.文法知識は、最初はインプットをもとに定式表現として覚えられ、使用されるが、次第に分析され、規則から作られるようになることが分かった。このような結果は、Tomasello(2003)が主張する母語を習得する子どもの習得プロセスと、「用法基盤モデル」(Langacker2000)の概念と近いと見受けられる。しかし、これは1学習者を対象にしたことで結果を一般化することはできないが、具体事例をもとに、それをたくさん使用することを通してスキーマが形成されていくことを示せたと思われる。

（ないだん ばやるまー）